

高2 難関大 国語



1章

【問題】(演習)

出典：柄谷行人『日本近代文学の起源』／獨協大学・00年・改

文章略解

近代以前の文学を読むと、われわれは「深さ」が欠けているように感じる。それは、現代のわれわれが、近代以前とは違う価値観を持ってその文学を読んでいるからである。近代文学においては「内面的深化」に重点が置かれ、それが文学史を語る上で重要な概念になってしまっているが、それは一つの価値観であって、普遍的に文学的価値を決定するものではない。われわれの基準になってしまっているその価値観を、改めて見直す必要がある。

解答

問1 A 〓 (ア) B 〓 (イ) C 〓 (イ)

問2 (エ) 問3 (イ) 問4 (ア)

問5 現代の私たちが、内面的な深みを描いた文学こそ価値があるとしてしまう見方。

問6 (ア)・(オ) 問7 (ア)

出典…小浜逸郎『大人への条件』／オリジナル問題

文章略解

近代社会における共同体の解体は、現代人のアイデンティティの不定をもたらした。通過儀礼という大人と子どもの境界線が希薄化し、核家族化により子どもが手厚く保護される対象となったことが、大人になったという自覚を持つことを困難にしているのである。身体的な成長と社会的な自覚との乖離が現代特有の諸々の問題を引き起こしているが、これは若者の未熟さに起因するのではなく、社会全体が生み出した問題なのである。

解答

- 問1 a ㉡端的 b ㉡要請 c ㉡射程 d ㉡規範 e ㉡隔離

問2 精神的統一性を保った共同体のもとで、その一員としての資格を得、共同体の核をなしている精神を理解・承認すること。

〔55字〕

- 問3 (エ) 問4 (オ) 問5 通過儀礼〔4字・12行目〕

問6 自分が大人になったという自覚〔71行目〕

- 問7 (ア) 問8 (イ)

問2 近代以前の「大人になる」ことの内実は第三段落に述べられている。列挙すると、

- ・大人になるということは、個人が自分の属すべき共同体の一員としての資格を得ること
 - ・共同体があるひとつの精神のもとに統一性を保っていれば、大人であることの意味はおのずから決まってきた
 - ・大人になることは、その共同体の核をなしている精神を心身両面において理解し、承認することを意味していた。
- 以上をまとめると。

問3

「いま述べた認識と

X

次のようなこともいわれている」と言うのだから、

「いま述べた認識」⇨前述の内容（【見解①】とする）と、

「次のようなこと」⇨後述の内容（【見解②】とする）を比較すればよい。

【見解①】 12行目～22行目

《近代以前》 通過儀礼 ↓ 子どもと大人はこの儀式によってはっきりと分けられていた

《近代》 教育課程 ↓ 人間はだんだんと段階的に成長していった大人になるものだというイメージ

【見解②】 24行目～42行目

《近代以前》 子どもはごく早い時期から大人の集団に仲間入り ↓ 明確な「子ども期」なし

《近代》 一般世間からの「家族」の明瞭な自立 ↓ 年少の人々を内部に囲い込み、「子ども期」の誕生

この二つの見解は、

【前者】 《近代以前》 ……明瞭

《近代》 ……曖昧

【後者】 《近代以前》 ……曖昧

《近代》 ……明瞭

という点で逆行するから、答は(イ)か(エ)に絞れる。が、どちらもが筆者の主張「近代以前は大人になることが自覚できたが、近代に

なってその自覚が希薄になった」ということの原因として想定しうる二説であるという点で通底し、「全く相反する」(Ⅱイ)ものではない。よって答は(エ)。

問4 アリエスの言葉は、まさに前に述べた【見解②】に相当するもの。従って【見解②】と合致する選択肢を選べばよい。

(ア)は、「共同体による子どもの保護」がおかしい。【見解②】によれば、近代に入って子どもを保護する外郭となったのは「家族」である。また、「身体的に未成熟な子ども」もおかしい。41～42行目に「身体的に成長した子どもも、社会的には未成熟な存在として、いつまでも家族のもとに留め置かれることになった」とある。

(イ)は、「近代以前の社会で大人と子どもを分けていた成人になるための儀式が、近代になってなくなった」とは、【見解①】にある内容。よってアウト。

(ウ)は、「自覚するようになった」がおかしい。【見解①】にせよ【見解②】にせよ、帰結にあるのは「アイデンティティの不定」なのだから。また、「自分たちが段階的に成長するのだと知り」もおかしい。19～20行目に「人間はだんだんと段階的に成長していつ大人になるものだというイメージを知らず知らずのうちに植えつける」とある。

(エ)は、「大人たちの関心が子どもの知的発達に移っていった」が限定しすぎ。40～41行目に「保護としつけと教育の対象として『大切』に育てられることになる」とある。

よって答は(オ)。

問5 私たちの時代は、自分が大人になったという自覚を「ある外面的な形式」によって与えられなくなった、とある。「私たちの時代」とは言うまでもなく「近代以降」である。

よって「近代以前」には生きていた「ある外面的な形式」ということで、「通過儀礼」がすぐに浮かぶだろう。

問6 傍線部周辺を整理すると、

《近代以前》

自分が大人になったという自覚 ↓ ある外面的な形式によって与えられた

《近代以降》

③ それ

↓ 人により著しく異なった多様なかたちによってしか確かめられない

よって答は「自分が大人になったという自覚」。

問7

【見解①】を採るにせよ【見解②】を採るにせよ、筆者は現代人のアイデンティティの不定の原因を、近代以前↓以後の「社会システムの変化」に見ている。社会全体がアイデンティティの不定を生み出したという点で、我々は「共犯者」なのであり、またアイデンティティの不定は「子ども」や「青少年」に限った話ではない、現代社会全体の問題であるが故に、我々（大人）も「被害者」たり得るといわけだ。

よってその「加害性」を、「子どもを成長させるという本来のつとめを果たさず」「子どもを批判してばかりいる」（Ⅱウ）とか、「だらしなさ」（Ⅱエ）とか、「青年たちの幼児性・非社会性を非難してばかりいる」（Ⅱオ）とかに求めているのは論外。

(イ)には「若者の幼児性はそのように彼らを教育し育てあげた大人たちの責任」とあるが、これも「教育の仕方」にのみ因を求めている点でおかしい。「大人たち自身も常に幼児性をもたざるをえなくなる」というのも、傍線部の「ある場合には」という記述に反する。よって答はア。

問8

(ア)は、「通過儀礼」という【見解①】の論点のみに依拠しているからダメ。

(ウ)は、「家族」という【見解②】の論点のみに依拠しているからダメ。

(エ)だと、「共同体の復活」によって「アイデンティティの不定」は解消される、ということになるが、そもそも筆者は具体的な解決策を提示していない。それから参考までに言っておくと、こうした「近代論」の文章に関する出題で、「昔に返りましょう」的な選択肢は全て間違いだと思ってい。そんなこと出来るわけないのだから。

(オ)、筆者は具体的な解決策を提示はしていないが、かといって「不可能」だとも言っていない。

(イ)は、本文最後の記述に合致する。

【問題】(演習)

出典：江國香織『デューク』／センター本試験(国語I)・01年

解答

問1 (ア) ①

(イ) ⑤

(ウ) ②

問2 ⑤

問3 ④

問4 ①

問5 ③

問6 ③

出典：南木佳士『冬への順応』／センター本試験(国語Ⅰ)・97年

解答

問1 (ア)＝① (イ)＝① (ウ)＝④

問2 ② 問3 ③ 問4 ③

問5 ① 問6 ⑤

解説

問1 センターの大問2の最初の設問は、毎年このような形で語句の意味を問うものになっている。設問の文言は「本文中における意味」となっているが、そうは言っても辞書的な意味が全く関係ないということはありえない。辞書義と文脈義の双方への目配りはどんな設問でも怠らないことだ。

(ア)の「加速度がつき」という表現の文字どおりの意味を取るならば②になるだろうが、この文章中では「秋は終わりに近づいてきた」(15行目)ことの形容としてこの表現が用いられていることに気をつけたい。別に秋が深まると落ち葉の速度が増すわけではないから、「落葉の(量的な)勢いが増す」と読める①の方がベター。③・④・⑤はいずれも「落葉」それ自体を主語としていない点での外れ。

(イ)の「つま先立って」についても(ア)と同様に考えたい。ここでは「千絵子の容姿に負けまいと」(38行目)という精神的なニュアンスで用いられていることに鑑みて①を取る。③・④・⑤では辞書義からも文脈義からも外れてしまう。

(ウ)についても、これが「田舎のお医者さんの奥さんというイメージ」(42行目)という意味合いで述べられていることに注意しよう。「国文の勉強なんか」という表現を捉えれば、この「国文」は単に「田舎のお医者さんの奥さん」のイメージづくりのため

の一例に過ぎないことがわかる。だとすると②の「国語の指導力」や③の「専門的な知識」では限定しすぎ。単に「知的な奥さん」的なイメージがあればいいのである。というわけで解答は④。①では「知的」であることから少々外れる。⑤の「文学の創作力」というのも、国文の勉強や田舎のお医者さんの奥さんのイメージからは遠い。

問2

傍線部分にある「暮れるのが早い、山に囲まれた村」とは、問題文の前書きの部分で「ぼく」が小学校まで育ち、同級生だった『千絵子』が高校まで育った村」についての描写であると説明されている。ところが、その後の「広葉樹林の落葉に加速度が……」以下の記述は、現在の「ぼく」が医師として勤めている「過疎の村」についての描写である。しかもその二つの村は、前書きの部分で「よく似ていた」とされているのである。したがって、この一行の描写はこの二つの村の類似するイメージをつなぐはたらきをしていると考えるのが妥当だろう。だとすると解答は②。①のように「断絶」を表現しているのでもなければ、③・④のように「対比的につな」いでいるわけでもない。また⑤に述べられているような因果関係もない。ただ単にイメージ的に連続しているだけである。

問3

傍線部分の前に「そのたびに」という指示語があり、これが「ぼく」の腕が「ときおり千絵子のノースリーブのなめらかな肌に触れた」(30～31行目)ことを指していることが読み取れば、選択肢を③に絞るのは容易であろう。④・⑤はこの「千絵子」の存在を全く踏まえていない点での外れ。①・②は「若い女性」と一般化して押さえているが、この場面で「僕」が「千絵子」を特別な異性として意識していることは「見えない嘘」(29行目)の意味・内容を考えれば明らかであり、③に比べればまだ不十分。また傍線部分直前の「鋭い電気のような」という表現から考えても、①の「期待」や②の「萎縮」よりは③の「ふるえてしまう」の方が近いだろう。

問4

傍線部分に言う「穴」とは、小学校のクラス全員で「千絵子」への見舞いの言葉を書いたときに、「ぼく」が「書いて謝らなければならぬ言葉が頭の中でうずを巻いていた」(7～8行目)にもかかわらず、うまく書くことができずに苦悶した跡である。この「謝りの言葉をうまく書けなかった」という内容を含んでいる選択肢は③・⑤の二つだけ。①の「穴があったら入りたい」では「穴」のニュアンスを取り違えている。②にあるように「本当の犯人を告げよう」としていながら、なぜかその人をかばって「い

たのではない。「おれです。すいません。」(10行目)と「ぼく」は「千絵子」に告白しているのである。④にある「自殺」に関して「ぼく」が考えたことは問題文中に述べられている(13行目)が、そのことが「千絵子」に伝わるのは傍線部分の次の「ぼく」の科白によってである。したがって、これにも無理がある。③と⑤との見きわめにあたっては、末尾の心情語を見比べてみよう。③では「許せるような気がした」という肯定的なニュアンス、⑤では「もうどうでもよい」という投げやりなニュアンスになっている。ここは前者の意味に取らないと、この傍線部分で彼女が「ぼく」を理解しようとしている姿勢に合いにくい。

問5 この傍線部分に言う「初夏の夜」が、受験生一般にとつてのものではなく、「ぼく」と「千絵子」の二人が夏期講習の受付を待ちながら将来の空想的イメージを語り合っていることを押さえない。②ではこの点を、一般論でしか捉えていないので誤り。④の「空腹という感覚」というのは問題文中に述べられていない。⑤の「思慮のある判断」云々は的外れ。①と③との見きわめにおいては、「未来のことをうちとけて語らい合う」というふうに具体的に押さえている点で①がベター。「この夜はなおさら」という記述も合っている。③ではこれらの点で、一般論の域を出ていない。

問6 傍線部分の「ねえ、ほんとにやってみない」という申し出が「千絵子」の側からなされていることをまず踏まえたい。これももちろん、「田舎のお医者さんの奥さんというイメージ」(42行目)の具体化である。この点を「結婚」としてきちんと捉えている選択肢は②・③・⑤である。①の「つかのまのあわい恋愛感情」という捉え方では不十分。④の「単に……思い出をなつかしんでいるのにすぎない」というのもこの点で難がある。「結婚」ということを捉えてはいるものの、③の選択肢に言う「親の反対を押し切って結婚しよう」というところまでは少なくともまだこの問題文中では具体化してはいないのでこれも誤り。②だと「ぼく」が「千絵子」にとつて「初恋の人」であったという記述が問題文中に求めにくい。というわけで解答は⑤。この選択肢の後半の記述は、「ぼくが……おれは山の診療所の医者になる、と、いくらか胸を張って言えるようになった」(23～24行目)という部分に照合している。

出典：鴨長明『無名抄』／ オリジナル問題

現代語訳

この（和歌の）道に志が深かった（という）こと（で）は、道因入道（＝藤原敦頼）が比べるものがない（ほどうずばぬけている）者である。（道因は）七、八十歳になるまで、優れた歌を（自分に）詠ませなすつてくださいと祈願するために、徒歩で（和歌の神様である）住吉（神社）に月詣でをしていたことは、たいそうめつたにないことである。

ある時の歌合わせで、（藤原）清輔が判者として、道因（入道）の歌を負けと（判定）したところ、（道因入道は）わざわざ判者のもとに参上して、真剣に涙を流しながら、泣いて（負けと判定されたことに）恨み言を言ったので、（歌合わせの）主催者は何とも言いようがなくて、これほどの重大な事態に（なったのには）出会ったことがなかった（＝これほどしつこく歌の勝敗について判者に抗議した人を見たことがないよ）と（人に）話しなすつたということだ。

（道因入道は）九十歳くらいになっては、耳などもはつきりしなかった（＝よく聞こえなくなった）のであろうか、（歌の）会の時は、とりわけ講師（＝詩の会や歌合わせの席で、詩歌を読み上げて披露する役の人）の席のそばに（人を）かき分け近寄って、すぐわきにびつたりと寄り添い座って、ひどく老いた姿で、（講師の声に）耳を傾けながら余念なく聞いていた様子など、（真剣であり）いいかげんなこととは見えなかった。

（藤原俊成卿が）『千載集』を撰びなさいましたことは、あの（道因入道）入道がなくなった後のことである。けれど、（道因入道の）亡くなった後でも、あれほど（和歌の）道に志が深かったものであるということ、（俊成卿は道因入道を）優遇して（『千載集』に道因入道の歌を）十八首お入れになったが、（俊成卿の）夢の中に（道因入道が）やって来て、涙を落としながら、お礼を言う（という夢を）ご覧になったので、（俊成卿は）格別にしみじみと心打たれて、もう二首を加えて（『千載集』に入れる道因入道の歌を）二十首

になさったということである。

そうあるのは〔Ⅱ『千載集』に道因入道の歌が二十首入集したことは〕当然のことであつたらう。

解答

問1 a Ⅱ (イ) b Ⅱ (ウ) c Ⅱ (ア) d Ⅱ (エ)

問2 (オ)

問3 (エ)

問4 耳なども遠くなったのであろうか、

問5 (i) 道因(入道)〔1行目〕 (ii) この道に志の深かりし〔1行目〕

問6 (ア)

問7 『千載集』に道因の歌が二十首入集したのは当然のことであつたらう。

出典：鴨長明『無名抄』「式部赤染勝劣事」の一節 / 中央大学・法学部・94年

現代語訳

和泉式部と赤染衛門の優劣（について）は、大納言（＝藤原公任）一人が判定なさった（こと）でもない。世間では（今では誰しもが）みな和泉式部（の方）を優れていると思つてゐる。そうではあるが、人のすることや作品（というもの）は、（その）本人が（まだ）生きてゐる間は、その（本人の）人柄によつて優劣（の評価が左右）されることがある。歌の面では和泉式部は並ぶものなき名人なのだが、身の処し方や態度、考え方などが、赤染衛門にはなかなか及ばなかつたのであろうか、紫式部の日記というものを読みましたところ、「和泉式部は（私生活において）ひどく感心しない点はあるのだが、気軽に手紙を走り書きしてゐる（とき）には、その方面の才能のある人（で）、ちょっとした言葉の気品も見えるようでございます。（しかし）歌は本当の歌人（の詠みぶり）ではない。口（から出てくるの）に任せて（詠んで）いる歌など（の中）に必ずすてきな一節（で）目を引く（表現）を詠み添えるようでございます。けれども、他の人が詠んだような歌を非難し批評してゐるような（とき）は、さあ（どうだか）それほどまでは（歌の極意を）会得してはいないだろう。単に口から自然に歌が詠み出されてくる（タイプな）のであるようだ。（こちらが）気恥ずかしくなるほどの（すぐれた）歌人だなあとと思われぬ。丹波守（＝大江匡衡）の奥方（＝赤染衛門）のことを、宮殿のあたりなどでは『匡衡衛門』と言つております。格別に傑出しているというほどではないが、ほんとうに心ひかれるほどに、歌人だからと（いつ）て何ごとにつけて（歌を）詠みまくつたりはしないが、世間に知られてゐるすべて（の歌）は、ちょっとした折々の歌も、こちらの方こそ（和泉式部の歌に比べて、聞く者が）気が引けるほどの（優れた）詠みぶりでございます」と書いてある。こういう次第であるから、（和泉式部は）その（存命している）当時は人柄によつて否定されて、和歌の面では思うほどには評価されなかつたが、本当は名人なので、優れた歌も多く、何かにつけては（歌を）詠み残してゐるので、勅撰集など（の歌集）にも（和泉式部の歌が）たくさん入つてゐる（であらう）。

解答

問 1 B

問 2 はづかしの歌よみ〔6～7行目〕

問 3 A

問 4 赤染衛門が詠んだ歌は、こちらが気が引けるほどのすぐれた詠みぶりでございます。

問 5 D

問 6 C

解説

問 1 「あり」という語は、文脈によって、ただ「ある、いる」のほかにも「生きている、適当である、普通である、言っている」など、さまざまに訳し分けなければならない面倒な単語だ。ここでは、傍線部の「主のある世」、すなわち「書き主本人のいる世（＝時代）」という逐語訳からだけでもだいたいわかるだろう。「生きている時代」を言ったものだ。さらに、紫式部、和泉式部、赤染衛門の三人が何の例として持ち出されているのか、という趣旨を確実に把握していれば、傍線部の意味は明らかだ。この三人は同時代の人。和泉式部は和歌には優れているが人柄や行動に劣るといふ指摘のあとに、同時代の人の評価の一例として、紫式部が和泉式部よりも赤染衛門の歌を評価していることが挙げられている。これは「主のある世には、その人がらによりて（評価の）劣り勝る事あり」の例である。

問 2 「真の歌よみにはあらず」は、紫式部が和泉式部を低く評価している部分だ。同じように紫式部が和泉式部を低く評価している

部分をほかの箇所から探せばよい。「歌よみ」の語と「おぼえず」という否定の語に着目してほしい。「はづかしの歌よみやとはおぼえず」が該当箇所だ。傍線部を含む文とこの文とで挟まれている部分では、この否定的な断定への理由が述べられている。すなわち、即興の才があり、またコツも心得てはいるが、それだけにしかすぎない、というのが紫式部の意見である。深みに欠けている、と言いたいのだろう。「丹波守の北方……」以降は赤染衛門の話題である。こちらを「これこそはづかしき口つきには侍れ」（傍線部4）と批評している点も、比較の上から注目しよう。ところで、「はづかし」は重要古語で、「気がひける・遠慮される・気づまりだ」と「こちらが気がひけるほど、むこうが立派だ」と、両方の意味がある。特に後者は大事だ。もう確実に理解はしているだろうか。

問3 「る」が自発の意味になるのは普通感情関係の動詞にいた場合だが、これは例外的。紫式部は「口」と「頭」とを区別し、和泉式部の歌は口先だけのもので頭では何も考えてはいない、ということが言いたいのだ。考えるより先に自然に和歌が口を突いて出るということで「自発」。「自発」は、本人の意思を越えて自然に（どうしても）そうなってしまったことだ。「めり」は「見＋あり」が縮まったもので、目で見た証拠に基づく推定。「なり」は「音（もしくは、鳴り）＋あり」が縮まったもので、耳で聞いた証拠に基づく推定。それが両者の語源だ。つまり、兄弟のような語であるわけで、両者とも、ラ行変格活用の語に接続する場合は、その連体形活用語尾の「る」を「ん」にしたり、省略したりする。（普通は終止形接続だが、ラ行変格活用の語に接続する場合は連体形接続だ。）

問4 問2で解説したとおり、和泉式部への批判との比較対照において、ここは赤染衛門を讃える評価を述べている部分である。「これ」の指す内容は「聞こえたる限り」、つまり耳にしている限りでの、赤染衛門の和歌だ。

「はづかし」は問2で述べたとおり。「口つき」は口調、口ぶり。ここでは、すなわち詠みぶり。和歌の調子といったものだ。「に」は下に「侍り」（「こそ」との係り結びの対応で「侍れ」と已然形になっている）があるから、断定の助動詞「なり」の連用形である。「侍り」に限らず「あり」「候ふ」「おはす」などの語（この場合は補助動詞）が下にあれば、そう判断できる。「侍り」が丁寧語だから、「には侍れ」で「ではございます」といった訳が浮かんでくる。

問5 紫式部の日記を持ち出して、和泉式部への評価の変化を述べた例で、この例をまとめる部分である。この例自体が、問1で述べたとおり「主のある世には、その人がらによりて（評価の）劣り勝る事あり」を証拠立てるものであったのだから、この部分と照らし合わせつつ、そのあとを読んで考える。赤染衛門は、和泉式部の特徴を印象づけるための比較の対照にすぎない。主旨はあくまでも和泉式部の方にある。従って、選択肢A・Bは不適切だ。また、選択肢Cは趣旨に反する。残るのは、選択肢D、Eだ。先に述べた点からどちらに比重がおかれているのかを考えれば、二つのうちの一方に絞りきれぬ。

問6 選択肢Cは「歌よみとてよろづの事につけてよみ散らさねど」から作つてあるが、これは赤染衛門に対する評。

選択肢Aは「はかなき言葉のほひも見え侍るめり」から、選択肢Bは「口に任せたる事どもに必ずをかしき一ふし目とまるをよみ添へ侍るめり」から、選択肢Dは「人のよみたらん歌を難じ理りいたらん、いでやさまでは心は得じ」から、選択肢Eは「歌の方は式部左右なき上手なれども」から作られた選択肢である。それぞれ現代語訳と照らし合わせてみるとよくわかるだろう。

4章

【問題】(演習)

出典：『大和物語』／ オリジナル問題

現代語訳

おなじ帝が、(鷹を使っておこなう) 狩をたいそうひどくお好みになったのだった。陸奥みちの国くにの磐手いわての郡こおりから献上した御鷹たかが、またとないほどすぐれていたのので、(帝は) この上なく大切にお思いいになって、御手飼てがいの鷹になさったのだった。(帝はその鷹の) 名前を磐手とおつけになっていた。その鷹を、鷹飼いの道に心得があつて、(鷹を) 預かつて世話することを役としていた大納言にお預けになっていたのだった。

(大納言は) 夜も昼も、この鷹を預かつて飼育なさるうちに、どうなさったのだろうか、(鷹を) 逃がしておしまいになったのだった。(大納言は) 肝をつぶしあわてふためいて探すけれども、全く見つけ出すことができない。山々に何度も家来を送っては搜索させたいけれども、全く見つからない。(大納言) 自身も深い山奥に入つてうろろと歩き回りなさるけれども、そのかいもない。この鷹が逃げたことを帝に申し上げずに、しばらくの間はそのままいられそうなのだが、(帝は) 二日三日のうちに(鷹を) 御覧にならない日はない(「(帝は) 二三日と間を置かず鷹を御覧になる」)。(大納言は) しかたがないと腹をくくつて、宮中に参上して(帝の) 御手飼いの鷹がいなくなったというのを申し上げなされるとその時、帝は、ひとことも仰せにならない。(帝が) お聞きつけにならないのであろうかと思つて、(大納言は) ふたたび申し上げなさるのだが、(帝は大納言の) 顔だけをじつと見つめなされて、何も仰せにならない。(帝は) 「よろしくない」とお思いいになっていたのだ、と(大納言は) 自分が自分でないような気がして(「茫然自失の体で」、恐縮して控えていらつしやつて、(大納言が) 「この御鷹(「磐手」) が、探索にもかかわらず、おりませんでしたことを、どういたしたらよいのでしょうか。どうして何のお言葉も下さらないのですか」と申し上げなされた時に、帝が、

いはで思ふぞ……磐手のことを口に出して言わずに、黙つて心の中で思っているほうが、口に出して言うよりもいっそう辛いのだとおつしやつたのだった。(帝は) このようにだけ仰せになられて、他のことは何もおつしやらなかつたのだった。(帝は) 御心の中で、

たとえようもないほど残念に思いになっていたのであった。

この(すばらしい)句に対し、世の中の人は、上の句をあれこれと付けたのだった。(しかし)もともとは、(この句は)これだけなのであった。

解答

- 問1 ① 接統助詞 ② 格助詞 ③ 係助詞 ④ 接統助詞 ⑤ つ・連用形・完了 ⑥ 接統助詞

問2 アは、程度がはなはだしい意で、「ひどく」のように訳されるが、イは、おそれ多いという意から派生し、「すぐれている」「立派である」「賢い」などと訳される。

ウは和歌の上句かみのくのことであるが、エは「本来」「もともと」「最初」の意である。

- 問3 A 二無う B 逸らし

問4 C 鷹を逃がしてしまったことを帝に申し上げないで、しばらくそのままでもいいけれど、E もつてのほかだと帝は思いであるのだなあ

- 問5 (ア)

問6 (1) 磐手のことを口に出して言わずに黙って心の中で思っているほうが、口に出して言うよりもいっそう辛いのだ。

- (2) (エ)

- 問7 (ア) 〳 B (イ) 〳 A (ウ) 〳 A (エ) 〳 B (オ) 〳 A

出典：『大和物語』〈六十四段〉の全文 / 神戸女学院大学・文・98年・改

現代語訳

平中(「平貞文」)は、なかなか好ましいと思う若い女を、(もとからの)妻の家に連れてきて(一緒に)住まわせていた。(すると妻は、この若い女に対して)憎らしげなことなどを言って、妻がとうとう(この女を)追い出した。(平中は)この妻に頭が上がないのであったのだろうか、(連れてきた若い女のことを)かわいらしいと思いつつも、引きとめることができない。(妻が)情け容赦なく(女に近寄るなど)言い立てたので、(平中は、若い女の)近くにさえ寄ることができずに、(高さ)四尺の屏風に寄りかかって立っているままで言った(ことには)、「(私たち二人の)男女の仲がこのように(一緒にいたいという)願いとほかけ離れていることだなあ、(たとえあなたが)遙か遠いところに行ってしまうとしても、(私のことを)忘れずに便りをお送りください。自分もそのように(あなたに便りを送りつづけようと)思う」と言った。(平中がそんなことを言ったのは)この女が、包みに(何か身の回りの)ものなどを包んで(平中のもとを去るばかりになって)、牛車を寄せてくるために(人を)行かせて待つ間(のこと)である。(平中はこの女のことを)たいそうしみじみとかわいそうだと思った。そんな様子で女は立ち去った。しばらくして(女が平中に)送ってきた(歌)、

わすらるな……(私のことを)お忘れにならないください。(私もあなたのことを)忘れてしまったらするでしょうか(、いいえ、決して忘れてはいません)。春霞に霞んでよく見えないように遙かに離れて暮らすことになって、(私があなたの家から)今朝出立したときに(あなたが)立ったままで約束したことを。

【訳註】女の歌のうち、「はるがすみ」は「春霞」と「はるか」「霞み」との、また「たち」は「発ち」と「立ち」との、それぞれ《掛詞》。かつ「霞」と「立つ」とは《縁語》にもなっている。

解答

問 1 (ア) || (3) (イ) || (1) (ウ) || (3) (エ) || (1) (オ) || (1) (カ) || (2)

問 2 (a) || (4) (b) || (5) (c) || (1) (d) || (7)

問 3 ① || (2) ② || (3)

問 4 A || (3) B || (7) C || (12) D || (9)

問 5 (3)

問 6 (4)

解説

問 1

(ア) 一般に、「接続助詞の直後に主語が明示される場合、その接続助詞を含む節の主語は直後に明示される主語とは別人である」というのが原則である。しかしここでは、「妻」以外の人物となると「平中」か「若き女」かということになるが、それでは愛し合う二人の仲にそぐわない。原則通りに考えようとすると、「平中がもとの妻に憎まれ口をたたいたので、妻が気分を害して若い女を追い出した」などとするしかないが、それでは2行目の「この妻にしたがふにやありけむ」という表現との整合性がとれない。やはりここは、「て」が《単純接続》の用法であることや、「憎まれ口をたたく」と「人を自分の家から追い出す」との行為にこめられる心情の共通性に鑑みて、接続助詞を挟んではいるが主語は「妻」で共通すると見るしかない。これはあくまで例外的な表現ととらえて、先に挙げた原則を確認しておくほうがよいだろう。

(イ) この部分を含む「この妻にしたがふにやありけむ」は係り結びして完結した表現になっているが、これは挿入句と見るべき形を

取っているので、接続助詞が仲介しないことから、次の「らうたしとおもひながらえとゞめず」の主語と共通と見なければならぬ。

(ウ) 「いちはやく」の解釈が重要。これは現代語ではもっぱら「反応の素早さ」を言う言葉になっているが、本来は「神威・靈威」を示す「いつ」を含む語と考えられており、「とつきに手向かいのできないような強い力がはたらくさま」を表す言葉だった。(神主の祝詞などでは今も「御神威〓みいつ」という言葉が聞かれる。)ここでは傍線部の言い方が激しくきつい様子と言うと考える。平中は(イ)にも見たように「妻」に対しては立場が弱く、「若き女」も追い立てられて出て行くのだから、強い態度とは言えない。

(エ) 続く科白の内容を見ると、発言者は家に残る人物であり、かつ出て行く女と今後とも文通することを期待している。

(オ) 「あはれなり」は「しみじみと胸を打つ思い」。一般に用いられる語なので、ここで「あはれ」に感じるはずの人物と考えるだけでは「平中」か「若き女」かで迷いがちなところだ。しかし、ここでいう「あはれ」の対象は、言葉として表現されている内容を見るかぎり、直前の「この女、つゝみにもものなど包みて、車とりにやりて待つほどなり」しかない。「あはれ」は車を待っている間に「女」が感じたこととして読むこともできそうだが、それよりも、客観的に描写されている女の様子に接して「あはれ」を催したものである。

(カ) 「おこす」は現代語「よこす」のもとになった語で、「遠くから近くへとものを送ってくる」ことを言う。ここで「遠く」へ行ってしまったのは「女」なのだから、その「遠くにいる女」から「まだ家にいる平中」へと手紙が送られてきたことを言うことになる。

問2

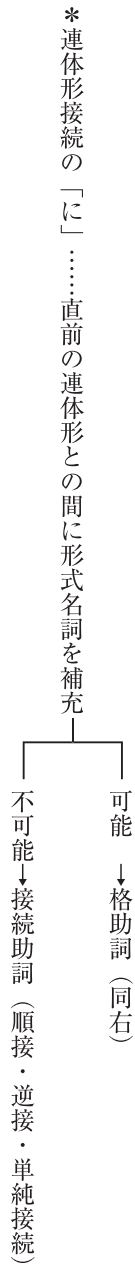
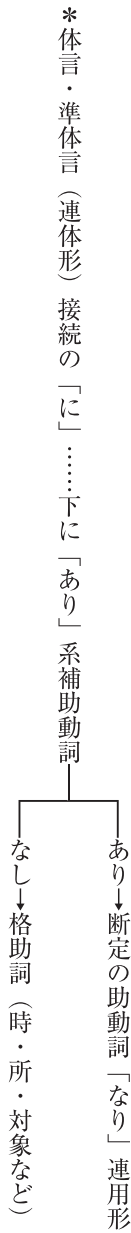
(a) 直前の「つひ」は「遂」の字をあてて解釈することができ、すると「つひに」で一語となる。自立語で、活用がなく、単独で主語に立つことができないが、単独で連用修飾語になることはできる。よって「つひに」は《副詞》であり、「に」はその一部である。

(b) 直前は四段活用動詞が「ウ」段音で終わる活用形になっており、文中なので《連体形〓準体言》だと判断できる。このような場合の「に」は《格助詞》または《断定の助動詞「なり」・連用形》のどちらかだが、そのあとに「あり」(または同義を含む「はべり／さぶらふ・おはす／おはします」など)が《補助動詞》として用いられる場合には、後者と判断する。

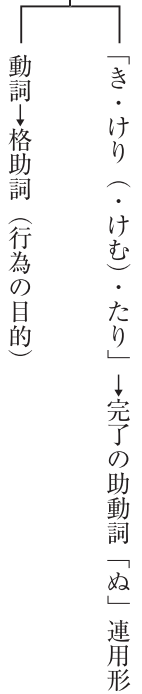
(c) 直前は四段活用動詞が「イ」段音で終わる活用形になっており、《連用形》だと判断できる。連用形に接続する「に」には《完了の助動詞「ぬ」・連用形》もあるのだが、この場合は常に直後に助動詞「き・けり・たり」が接続しなければならない。ところがここでは直後が動詞になっている。このような場合の「に」は《格助詞》で、「直後の動詞の行為の目的」を示す。

なお、格助詞は本来は体言に接続するのだから「連用形に格助詞が接続する」のは不自然に見えるかも知れないが、活用語の連用形には体言としての働きもあり、《転成名詞》と呼ばれる。ここでの「とり」も「とるため」と体言句に置き換えると意味がわかりやすい。転成名詞の典型として「光る↓ひかり（が射す）」、「話す↓はなし（を聞く）」、「遠し↓とおく（からやってくる）」などの例を挙げておこう。

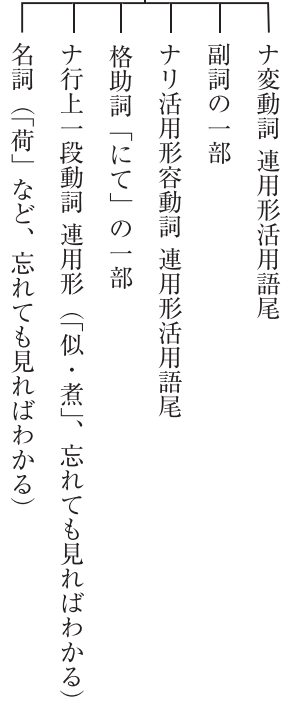
(d) 一見、前項の前半で述べた形にも思われ、完了「ぬ」連用形と紛らわしいが、そうだとすると直前の「い」が単独で動詞の連用形になっていることになる。「い」が連用形となる動詞としてはヤ行上一段活用動詞しかあり得ず、「射る」・「鑄る」・「沃る」などが知られているが、いずれも文脈に合致しない。したがって「いに」で一語と見ることになるが、下に過去の助動詞が接続することからこれもそのままで連用形であることになり、終止形が「いぬ」であることがわかるから、傍線部は《ナ変動詞の連用形の活用語尾》だと判断する。



*連用形接続の「に」……直後に



*その他の「に」



問3

① 「らうたし」は基本古語の一つ。「労痛し」の転と考えられており、「自分より弱い者や劣る者をいたわってやりたいという気持ち」が基本にある。類義語に「いとほし」・「うつくし」が挙げられるので、この三語について同時に辞書を引いて、それぞれのニュアンスの違いを各自確認しておくことを強く勧める。

② これについては問1の(ウ)の解説を参照のこと。現代語の感覚で(1)などを選んでも一見意味が通じそうにも思われるが、古文の問題で現代語と同義の箇所の解釈を求めるのは極めて稀である。(ただし、「稀だ」というのは「たまにはある」ということでもある。「ない」と決め付けるのは禁物だ。)前項の「らうたし」とは異なり、「いちはやし」を基本古語であるというつもりはないが、せっかくだから憶えておこうとするのが受験生の心意気というものである。

問4

Aは、具体的な助詞の直前に空欄があるのだから、助詞の分類を言っているものと判断する。古典文法における助詞の分類には、この問題の選択肢となっている四種の他に《格助詞》と《係助詞》とがあり、つごう六種類に分類できればよい。「だに」の用法はほぼ二種とよいてよいから、B・C・Dについては、説明文後半の表現を手がかりとしてまずDを埋め、次に消去法的にもうひとつの用法Cを確定し、最後にそれと共通の用法を持つ助詞をBに埋める、というのが最も確実な解法である。

ただし、Dの根拠となる見分け方に「命令・希望・否定など」とあるのはまずい言い方である。諸君の頭の中では、「《仮定条件》、《願望・意志表現》、《命令・禁止表現》の三種の表現に先行する場合」としておくべきだ。

また、選択肢では「限定」と言っているが、これはふつう「のみ」および「ばかり」という副助詞の用法（これらの助詞については他の用法のほうが重要だが）を説明するのに用いる語で、「だに」の《類推》でないほうの用法を言うには、通常は《最低限度》や《最小限》といった用語で表現する。与えられた選択肢の中から選ぶとすれば「限定」が最も近いが、記述式的答案では「だに」の用法を「限定」などと書いても得点は認められないだろうから、こんな憶え方をしないように気を付けよう。

上記の二点については、「選択型の設問に特有の意地悪な出題法」と見ることも、「単なる出題者の勉強不足」と見ることもできるが、いずれにせよ「悪問」の誹りは免れない。文法にはもつと大切なことが他にあるとも思う。ただし、受験生としては出されたものは答えを出さなければならない。選択型の問題では「正しい」答えでなく「最も妥当性の高い」答え、言い換えれば「最も瑕の小さい」答えが「正解」とされることに注意することだ。

問5

選択肢型の解釈問題では、一般的には「文法事項」を見つけて、各選択肢でそれに該当する部分の訳し方を「横に」比べて消去法をとってゆくのが鉄則である。この傍線部に含まれる、訳し方の決まっている文法事項としては、「たまふ」が《尊敬語》であることと「とも」が終止形に接続して《逆接仮定条件》を示す接続助詞であることとの二点が挙げられるが、ただし、与えられた選択肢はいずれもこの二点の訳を比べる限り優劣はない。また「ものす」がいわゆる《代動詞》であることから、結局は文脈の読みとりができていくかが決め手となる。

そこで、ここでは傍線部の逆接仮定条件に導かれる帰結部に「忘れずにお便りをください」と言っていることから、その前に置くに相応しい表現を選ぶことになる。ただしそれでも(1)と(3)のどちらを採るかというところまで来ると、決め手にはならない。文章の最後に女から「お便り」が届くことが説明されているが、その歌の中に「はるか」とあることから、やっと(3)に落ち着くといったところか。

しかし実は、この問題は「世界」の古語における用法を知っていると(3)しか選べないのである。もともと漢語だから字義のとおりで現代語と共通の意味もあるのだが、やまとことばで書かれた文章の中に突如あらわれた場合は、ほぼ「遠隔地・(都)に対して」地方・いなか」といった意味合いであることが多い。

問6

- (1) 「忘れたり忘れなかつたりするでしょうか」の部分と「そのように……忘れたりしません」の部分とが食い違っており、選択肢自体が（傍線部の表現とは無関係に）日本語として意味をなさない。
- (2) 初句の「わすらるな」は《終助詞》によってこれ自体が完結した一文をなしている。続く三つの選択肢はいずれもこれを活かした訳になっているので、この点で(2)は他より妥当性が低い。
- (3) 第二句の「しぬる」を「死ぬ」の連体形として解釈しているが、これでは（係り結びの形だけは成立するものの）直前の「忘れや」とあわせると「忘れ死ぬ」の疑問形となり、選択肢中の「忘れずに」の否定表現の根拠もなければ「死んでゆくことを」と肯定形であることも矛盾する。また、「私が今朝立ちながら」とあるが、立っていたのは「若き女」ではなく「平中」のほうである。当時の女性は家の中では基本的に坐っているものであり、何かを「待つ」のにずっと立っているというのは極めて不自然なことである。
- (4) 和歌にこめられた掛詞の意味合いはほとんど無視されており、このまま記述型の答案とするならまともな得点はとうてい期待できない。しかし、少なくとも文法的には間違いない。次の選択肢に瑕があれば、これを正解とせざるを得なくなる。（実際に、次の説明のとおり、そうなる。）
- (5) 初句の終助詞「な」は和歌の中では《禁止》の用法である。たしかに「な」には終止形に接続して《詠嘆》や《軽い確認》を示す用法もあるが、「でしようね」の訳に見られる《推量》の根拠がない。また、「今朝立ちながら交わした約束を」とあるが、これでは二人とも立っていたことになり、(4)では明確に立っていたのが「平中」であることを示しているのに劣る。

●
メ
モ
●

出典：『晏子春秋』／國學院大學 00年改

書き下し文

晏子將に楚に至らんとす。楚王之を聞きて左右に謂ひて曰く、「晏嬰は齊の辞を習する者なり。今方に來たる。吾れ之を辱しめんと欲す。何を以てせんか」と。左右對へて曰く、「其の來たるを為すや、臣請ふ一人を縛して王を過ぎて行かん」と。晏子至る。楚王晏子に酒を賜ふ。酒酣にして吏二あり、一人を縛して王に詣る。王曰く、「縛する者は梟為る者ぞや」と。對へて曰く、「齊人なり。盜に坐す」と。王晏子を視て曰く、「齊人固より盜を善くするか」と。晏子對へて曰く、「嬰之を聞く。『橘淮南に生ずれば則ち橘と為り、淮北に生ずれば則ち枳と為る』。葉徒だ相似たるも其の実味同じからず。然る所以の者は何ぞや。水土異なればなり。今民齊に生長して盜まず、楚に入れば、則ち盜む。楚の水土民をして盜を善くせしむること無きを得んや」と。王笑ひて曰く、「聖人は与に嬉する所に非ざるなり。寡人反りて病を取る」と。

現代語訳

晏子がもうすぐ楚に到着しようとしていた。楚王はこのことを聞くと、側近の家臣たちにむかって言った、「晏嬰は、齊の国の弁術の巧みな者（として有名）だ。（その晏嬰が）今ちょうど（我が国に）来ようとしている。（そこで）私は、彼に恥をかかせてやりたいと思う。（それには）どうしたらよからうか」と。側近の家臣たちがお答えして言った、「晏嬰が来たときに、どうか私どもに、一人の男をしばり上げて王の前を通りかからせて下さい」と。（さて）晏子が（楚に）到着した。（そこで）楚王は（晏子を酒宴に招き）晏子に酒をごちそうした。その酒宴が最も盛り上がったところで、役人が二人登場し、一人の男をしばり上げて王の御前にやって来た。王は言った、「そのしばり上げている男は、いったい何者であるか」と。（役人は）お答えして言った、「齊の国の人間です。盗みの罪に

ふれたのです」と。王は晏子を見て言った、「斉の国の人間はもともと盗みがうまいのか」と。晏子はお答えして言った、「私、嬰は次のようなことを聞いたことがあります。『橘は淮南の地に生えれば橘（「たちばな」となるが、（同じ木が）淮北の地に生えると枳（「からたち」となる）』と。葉だけはお互いによく似ていますが、その実の味は同じではないのです。そのようになる理由は何でしょうか。（それは、淮南と淮北とでは）自然の環境が異なっているからです。（さて）今、この男は、斉の国に生まれ育っていた（「生活していた」とときには、盗みはしなかったのに、ここ楚の国に入ると（「生活するようになると）盗みをはたらきました。（ということは）楚の国の自然の環境がこの男に盗みがうまくなるようにさせているにちがいありません」と。王は笑って言った、「聖人は、（私たち凡人が）いっしょにたわむれる相手ではないな。私は逆に恥をかいってしまった」と。

解答

問1 まさにそこにいたらんとす

問2 ① 〓まさに ② 〓もとより

問3 B 〓オ D 〓エ

問4 C 〓左右 G 〓楚王

問5 1 〓カ 2 〓ウ

問6 返り点 〓ア 現代語訳 〓コ

問7 聖人は与に嬉する所に非ざるなり。

問8 ウ

書き下し文

漢の董永は千乗の人なり。少くして偏孤、父と与に居り、力を田畝に肆す。鹿車もて載せて自ら随ふ。父亡くなりしも以て葬すべし。乃ち自ら売りて奴と為り、以て喪事に供す。主人其の賢なるを知り、錢一万を与へて之を遣はす。永三年の喪を行ひ畢り、主人のもとに還りて、其の奴職を供せんと欲す。道に一婦人に逢ふ。曰く、「願はくは子の妻と為らん」と。遂に之と俱にす。主人永に謂ひて曰く、「錢を以て君に与へしなり」と。永曰く、「君の恵を蒙りて、父の喪収蔵す。永小人たりと雖も、必ず勤めに服し力を致し、以て厚德に報いんと欲す」と。主人曰く「婦人何をか能くせん」と。永曰く「能く織るなり」と。主人曰く、「必ず爾らんとせば、但だ君の婦をして我の為に織百疋を織らしめよ」と。是に於て永の妻主人の家の為に織ること十日にして畢る。女門を出でんとして、永に謂ひて曰く、「我は天の織女なり。君の至孝なるに縁り、天帝我をして君を助け償を償はしむるのみ」と。語り畢り、空を凌えて去り、在る所を知らず。

現代語訳

漢の董永は千乗の人であった。(董永は)子供の時に(母親と)死に別れ、父親と二人ぐらして、畑仕事に励んでいた。幅の狭い車に(父親を)載せて自分は(その車を押して)その後について歩いた。父親が亡くなったが(彼には)葬式を出すだけの金がなかった。(そこで)我が身を売り奴隷となつて、葬式の費用にあてた。(彼を買った)主人は彼の徳行がすぐれていること(「彼が孝行息子であること」)を知り、錢一万を与えて郷里に帰してやった。董永は(帰宅して)三年間の父の喪に服した後、主人のもとへ戻つて、奴隷としてのつとめを果たそうと思つた。その途中で一人の女性に出会つた。(その女性が)言うことには、「どうぞあなたの妻にしてください」と。そんなわけで連れ立って主人の家へ行つた。主人が董永に向かつて言つた、「あの金はお前にやったのだよ」と。董永は言つた、「あなたの様の厚い)恩に報いたいです」と。主人は言つた、「奥さんは何ができるのか」と。董永は言つた、「機織りができます」と。

主人は言った、「どうしてもそう（恩返しが）したいのなら、奥さんに私のために絹百疋を織らせなさい（それだけで十分だ）」と。そうして董永の妻は主人の家のために（絹百疋を）十日で織りあげてしまった。その女性は（主人の家の）門を出ようとして、董永に言った、「私は天上の織女です。あなたがこの上ない孝行者であるため、天帝が私にあなたを手助けさせ負債を返済させたのです」と。（こう）言い終わると（女性は）空に舞い上がり、姿を消してしまった。

解答

問 1 (エ)

問 2 ① ≡ (イ)

② ≡ (ア)

問 3 私はとるにたりない者ではありませんが、必ず一生懸命に働いて、あなたさまの恩に報いたいです。

問 4 われをしてきみをたすけさいをつくなわしむるのみ（と）。

問 5 (イ)

解説

問 1 返り点だけがついた漢文の訓読の設問。

選択肢は、1 ≡ 語法・文法的なポイントとなる語の読み方の観点、2 ≡ 語順の観点、そして、3 ≡ 文脈に合致した意味内容の観点、の三点で絞っていくとよい。

まずポイントとなる語だが、「自」は①「みづから（≡自分で）」、②「おのづから（≡自然と）」、そして③「…より」の三つの読み方がある語。しかしこの場合選択肢すべてが「自ら」と読み、①「みづから」の意味となっている。一方「為」は、①「なす」、②「つくる」、③「なる」、④「をさむ」、⑤「たり」、⑥「ためニ」、⑦「る・らる（≡受身の助字）」などの読み方がある要

注意の多義語である。ここでは、注にあるように主人公の董永が父の葬儀の費用を捻出するために「奴（＝奴隸）」となったという話なので、(イ)・(エ)の「奴と為り（＝奴隸となつて）」が妥当である。(イ)は後半を「供せらる」と受身に読んでいるが、受身を示す文字もない上に、受身では前半の「自ら（＝自発的に）」と矛盾してしまう。ここから、「自分で身を売って奴隸となり、（その金を）葬式代に充てた」と解釈できる(エ)を選ぶ。

問2 主語・主体判別の設問。

傍線部は「願はくは子の妻と為らん」と読む。「願はくは…未然形＋ん（＝どうか…させて下さい）」という意味の「請願」の語法である。直前に「道に一婦人に逢ふ。曰く、…」と明示してあるのだから、①「誰の」は(イ)「婦人」である。「子」は「し」と読んで、対等以上の二人称を表す人称代名詞で「あなた」にあたる。「妻と為らん」というのだから、②「誰を」は「夫」にあたるはずの(ア)「董永」が正解である。

問3 訓点のある漢文の現代語訳の設問。

正確を期するためにはまず「書き下し文」を作って、それを丁寧に直訳していく作業が不可欠である。ここは「永小人たりと雖も、必ず勤めに服し力を致し、以て厚德に報いんと欲す」と書き下される。「永」は主人公「董永」の名だが、漢文や古文では、自分で自分の名をいうのは「私め」という謙譲の一人称である。「雖も」は「終止形＋と雖も」と読んで、①「逆接仮定条件（＝…だとしても）／主語が下にある場合が多い」と、②「逆接確定条件（＝…だけれど）／主語が上にある場合が多い」を表す。この場合は、自身をへりくだって主語「永」が上にあるのだから、②「逆接確定条件」である。述語の「…と欲す」は、主に一人称で用いて①「願望（＝…したいと思う）」、主に三人称で用いて②「状態（＝今にも…しようとする）」を表す。また、「小人（＝くだらない人物）」は「君子（＝立派な人物）」と対照的に用いられる重要単語である。これらの語の解釈に注意して、書き下し文を丁寧に訳していけばよい。「厚德」が「誰の」恩義なのかを補っておきたい。当然父の葬儀に「錢一万」を与えて家に戻らせた主人に対する恩義である。

問4 ひらがなによる書き下し文の設問。

漢文としての読み方が決まっている句法・語法が必ず含まれているので、そこを正確に読む必要がある。この場合は、「令……」が「……をして」未然形＋しむ（マ行下二段活用）」と読む使役の助字であり、文末の「耳」が「名詞・連体形＋のみ」と読む限定の助字である。「助」「償」などの用言も古典文法に則り「たすく（カ行下二段活用）」、「つぐなふ（ハ行四段活用）」と正しく読めなくてはならない。返り点で語順は示されているので、接続と活用に注意して正確に読む。

問5 空欄補充の設問。

妻が「我は天の織女なり。君の至 **A** なるに縁^より、天帝……のみ」と告白する文脈である。「君」とは本説話の主人公「董永」であること、彼の行いは自ら奴隷となつて父親の葬儀を全うしたことを押さえて選択肢を吟味する。自己犠牲の上での「親孝行」と見るのが最も妥当であるから、(イ)「孝」を選ぶ。なお、「至」は「それ以上ない、最高の」という意を表す接頭語として用いられ、現代日本語でも「至急」「至高」「至福」「至難」「至言」など多くの語がある。

《漢文補充問題》

解答

問1

① 有_ル徳者、必_ズ有_リ言。有_ル言者、不_ニ必_ズ有_レ徳。

○通釈 徳のある人には必ず善言がある。しかし善言を言う人が必ずしも徳のある人とはいえない。

② 先_ニ即_チ制_シ人、後_ニ則_チ為_ル人_ノ所_ト制_ス。

○通釈 人より先に手を下せば相手を制することができるが、人に後れてやると相手に支配される。

問2

① a 書き下し文 己_ノ欲_セせざる所_ハは、人_ニ施_スこと勿_クかれ。

b 通釈 自分の望まないことは、他人にもしてはいけない。

c 置字 〔於〕

② a 書き下し文 士は当_ニ天下_ノ憂_ヒに先_ニんじて憂_ヘ、天下_ノ楽_シみに後_レれて楽_シむべきなり。

b 通釈 士たるものは、天下の人々が心配するのに先んじて心配し、天下の人々が楽しんでから楽しむというようではなくてはならない。

c 置字 〔而〕(二箇所ある)

問3

- ① 〓 〓 ここにおいて
② 〓 〓 ここをもつて
③ 〓 〓 これをもつて
④ 〓 〓 おもへらく

書き下し文……

問3

- ① 是こゝに於おて項王乃ち馬に上りて騎す。
② 妾せうこ是を以もつて去るを求むるなり。
③ 是を以これて知る、万事前定せざるは無し。
④ 以おもへらく世に復た為に琴を鼓するに足る者無しと。

※現代語訳はテキスト参照のこと。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--